

令和5年度 第2回学校関係者評価委員会

日 時：令和6年3月29日（金）19：00～19：50

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：小林小夜子，有福浩二，大坪 健，吉岡正恒，
淡野義長，韋 傳春，林勇一郎，荒木一博，山内 満，岩永隆之

欠席者：栗田千栄

座 長：韋

1. 校長挨拶

- ・国家試験合格発表の結果について ※（ ）内は全国

PT：新卒 91.7%(95.2%)、全体 90.0%(89.2%)、既卒者は全員合格

OT：新卒 94.4%(91.3%)、全体 89.5%(84.1%)

- ・入学者の状況

最終的に理学療法学科 39 名、作業療法学科 25 名入学予定となった。4 年制大学の合格者が多く辞退者が出たことも要因の1つと考える。

2. 出席者紹介

3. 開会

韋) 当委員会第6条の規定による出席数を満たしており、本委員会は適切に成立していることを確認する。

4. 委員長選出

韋) 委員長は小林小夜子先生ですすめさせて頂く。

5. 前回会議後の報告

韋) 保護者アンケートからの意見への対応

- ・保護者との情報共有について、広報誌 POTNurturer(第10号)を発行し対応している。

6. 審議事項

『令和5年度 学校自己評価結果について』（別紙参照）

荒木) 評価基準は、昨年度と比較し、1：大きく後退した、2：少し後退、3：変化なし、4：少し改善、5：大きく改善という5段階で各項目を調査した。全体的には過去5年分の平均値を一覧にしているが、例年とあまり変化がない。次に今年度の意見である。特徴的な意見を紹介する。(1)教育理念も大きな変化は無いが、ポリシーを見直しており、少し成績が上がっている。(2)学校運営については、校長が交代し、職員会議での議論が整理され、形にして残すということが進んだことで改善が見られたと考える。(3)教育活動で職員向け研修会について、学園全体での研修会は数回なされているが、本校独自の勉強会は設けられておらず、低い評価が続いている。(4)学修成果の退学率の低減については、改善ができていない。理由としては、仕事の内容を把握せずに進学してきたり、経済的や精神的理由などの対策が難しいと感じる部分もあるなどのコメントがある。(5)学生支援については、コロナ前に戻りつつあり改善してきている。高校との連携やキャリア教育についても、海星高校と連携しているが、関連分野における業界との連携を含め、多方面での実施していきたい。(6)教育環境については、経年劣化が進んで最低限の対応にとどまっている。使用機器も古く破損している部品などもあり、整備が十分でないと感じている。しかし、ICT教育に関しては各教員で工夫が進んできて

いる。(8)財務については、学生数が定員割れの状況の中で、十分な予算確保もできず、安定しているとは言い難い。その内容についても、本部が管理しているため、教職員には見えづらいところがあり、低い点数のままである。(10)社会・地域貢献に参加できる時間が取れていない。学生のボランティア活動についても依頼数も少なく積極的に取り組めていないこともあり、低い点数にとどまっている。

有福) 評価基準は昨年度と比較して点数化しているということは、(3)教育活動の研修等は悪化しているのか。

荒木) そのとおりである。

小林) 教員が望んでいる研修でないと点数は下がる。望む研修を調査する必要がある。

章) 教員向け研修会も考えていきたい。

吉岡) 学校自己評価後の次年度に向けての取り組みはどうか。

章) 本会議後に各委員会で検討しているが、再度流れを確認したい。

大坪) 就職後の離職率の調査は行われているのか。

荒木) 調査したことはない。

大坪) 卒業生への支援というところで具体的な計画はあるのか。

林) 同門会という形ではできていないが、同窓会を兼ねた勉強会を自分が担任したクラスで行っている。同門会は卒後教育と学校教育の間のような位置づけである。

大坪) 本院では、入職後に実習では担当を持たずに臨床に出てきている現状もあるので、MTDLPのツールを使って勉強会を開催し臨床思考過程を学ばせている。

林) 入職後早期に退職、理学療法士自体を辞めてしまう人が一部いるようである。同窓生の集まりも重要であるが、学校と臨床との連携も大切だと感じる。

大坪) 学校側から就職施設に臨床思考過程を学ばせて欲しいという要望を出すのは難しいと思うのだが、このような働きかけで新人の自信になったり、離職率の低減につながればと考える。

『令和5年度の学校行事の振り返りと令和6年度の計画について』

岩永) 今年度の学校行事については、ほぼ例年通りに戻せた。学生はコロナ渦で集団活動から離れていたが、行事後のアンケート結果では90%以上が肯定的な結果であった。

有福) 上下のつながりが大切だと思う。継続してほしい。

林) イベントの経験がない学生が多く、行事の重要性も感じる。

章) 以前のような活動班のつながりも少ない。イベント参加は離職率などに影響する職場での適応にもつながっている。

山内) クラス内でも交流が少なく感じる。

吉岡) 同門会とはどういう活動なのか。

林) 勉強会としての活動である。若い先生方が先輩方から指導を受ける機会になっている。しかし、最近は対面での参加者が少ないことが課題である。

小林) 離職率、退学率の低減を考えると、卒業生だけでなく学生も参加させることで効果があると思う。

林) コロナ渦以前は実施していた。

小林) 新入生にも交流を進めると効果的であると思う。経費と時間を考慮し計画する価値はある。教員としての情熱、勢いと見守りが大切である。

岩永) 3年生が55人が、1人約2回就職面接の練習を実施し、延81人の面接練習をしている。また、ビジネスマナーや女性のナチュラルメイクなどの準備も行っている。求人数についてもほぼ例年同様である。

章) 就職や卒業生の動向についてのご意見はないでしょうか。

有福) 実習等で良い学生がいて就職してくれないかと考えることもあるが、求人を出すタイミングが難しい。

大坪) 卒業生について個人差が大きい。帰属意識や社会人基礎力、世間一般の風潮なども教育することも大切だと感じる。

小林) 強く共感する。ジョブクラフティングというキーワードになるが、仕事を創意工夫する。時間で終わる仕事ではなく、自分の使命を達成していくキャリア形成の方法が大切である。社会に出る前に専門学校で仕事とは何かを考えさせることが重要である。

林) 次の実習オリエンテーションで、8週間の実習の過ごし方、準備、実習後の自身の姿など、学生自身に調べさせてグループワークさせる予定である。教授ではなく、ディスカッションさせる。

小林) コロナ渦で減ってしまっていたアクティブラーニングを実施し考えて行動できるように鍛えていく必要がある。

『創立30周年記念事業について』

章) 来年度、本校が創立30周年となる。記念事業として、式典、講演会を計画している。日時：令和6年11月9日(土曜日)一般講演としてリハビリテーションの経験もあるロサンゼルスオリンピック金メダリストの森末慎二さん、2部の方は活躍している理学・作業療法学科の卒業生を2名ずつ選出し講演後にディスカッションしてもらおう予定である。都合がよろしければご参加してほしい。

7. 総評

小林) 学校の自己評価に基づいて色々貴重な意見が出て素晴らしいと思った。このような自己評価は、次回に向けてどう施策を取っていくかが大事である。全てに対して施策することは無理があるかもしれない。何か1つやることを決めて実行してもらえれば、1つずつ、1歩1歩前進していくと思います。

8. 謝辞

淡野) 貴重なご意見に感謝する。コロナ渦を過ごしてきた学生達である、新しいことを取り入れながら対応していきたい。

9. 閉会

次回の学校関係者評価委員会は、令和6年9月29日(金)19:00を予定する。